二〇二三年度　大阪星光学院高等学校　入学試験問題

国語

（その１）

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

母を病気で亡くした「僕」（太一）は、父と妹（菜月）との三人で母の故郷に引っ越した。悲しみに暮れる「僕」は、中学校にも馴染めず、妹もまた毎晩蒲団の中で泣き明かしていた。そんなある日、「僕」は久しぶりに本屋を訪れ、どこかなつかしさを感じさせる「中村さん」という名の女の子に出会う。その女の子は「僕」の名前も聞かず、数冊の本を教えてくれた。それらの本を通して「僕」の生活は少しずつ変わっていき、母を失い傷ついた妹の心も癒やされていった。

本屋にはなかなか行けなかった。

本を読む以外にもやることがある。それは、新鮮な驚きだった。登下校のときに誘われたり、休み時間に話しかけられたり、他愛もないことばっかりだったけれど。

「＊1重松清、読んだよ」

＊2上別府がいった。

「え、もう？」

「兄貴が文庫で一冊持ってた。『その日のまえに』っていうんだ。すげえよかった」

僕はだまってうなずいた。その本は内容紹介を読んだだけで棚に戻した。「その日」を過ぎてきた僕には、その本は読めない。きっと死ぬまで読めないだろう。

「しっかし、aシブいよな。親父の趣味か？」

いや、と僕は首を振った。父さんは小説を読まない。

「こないだ、本屋の前で会ったときに一緒にいた子。あの子に教えてもらった」

なにげなさそうに話したけれど、ほんとうは思い切って告白したつもりだった。しかし上別府は首を傾げた。

「一緒にいた子？　誰だそれ」

僕は上別府の日に焼けた顔をAしげしげと見た。わざと話をはぐらかしているのだろうか。

「ほら、黒いセーラー服の、同じ歳くらいの子」

「黒いセーラー服って、今どきないだろ。どこの古めかしい学校だよ」

今度は僕がきょとんとする番だった。そういわれてみれば、セーラー服を着ている子自体を見かけない。うちの学校も白いシャツにグレーのスカートだ。もう少し寒くなれば、その上にブレザー。

「じゃあ、あれはどこの制服なんだろう」

僕がいうと、

「何いってんだおまえ」

上別府は声を上げて笑い、鞄を肩にかけて部活に行ってしまった。

その夜、僕はぼんやりと考えた。もしかしたら、彼女は遠距離通学をしている高校生なのかもしれない。ほとんど根拠はないが、そう推測して結論づけることにした。もしも彼女が何らかの理由で自分の学校の制服を着ているのではないのだとしても、その理由はわからなかった。考えてもしかたがない。それよりも、彼女のすすめてくれた本はどれもおもしろかった。そのことが大事なんだと思った。①思おうとした。

寝る前に蒲団の中で読む本は僕を遠いところへ連れていってくれる。バレーボールは飛んでこなかったし、青々と晴れ渡る空も出てこなかったし、中村さんも姿を現さなかった。

本を閉じた。バレーボールも青い空もどうでもいいけれど、彼女には登場してほしい。彼女に会いたい、と思った。

やっと週末になったのに、土曜日は父さんに釣りに誘われた。

当然菜月も行くものと思ったのに、あっさり断られた。父さんは戸惑ったみたいだ。

「読みたい本があるから」

菜月はいった。ずるいぞ、菜月。僕だって読みたい本はあるし、行きたい本屋がある。睨んでみせたけど、知らん顔されてしまった。

（その2）

ふたりで出かけた。

「こんなに水のbスんだ川があるんだなあ」

父さんはしみじみといった。

すっかり秋の気配がしていた。川面（かわも）は細かく波立って、意外に強い光を反射させていた。無数の魚が跳ねているのかと見紛（みまが）うほどだった。

「釣らなきゃ」

そうして、Bまるで親の仇（かたき）みたいに釣り竿（ざお）を振っては（つ）cエサを飛ばしていた。

母さんが死んで、仕事を変えて、家も売って、とりあえず息子と釣り糸を垂らすくらいしかすることがないんだろう。父さんは釣りをしながらよく笑った。ぜんぜん楽しそうじゃなかったけれど。

「こっちへ来て、よかったかな」

不意に父さんがいって、こっちというのが今釣りをしているこの川辺のことのように思えた。でも、きっと違う。こっち。母さんの生まれ故郷であるこの町のことだ。小さい頃こそ夏休みには毎年遊びに来ていたけれど、高学年になると毎年ではなくなり、来ても数日しか滞在しなかった。それでも、去年のお盆に遊びに来たのは、虫の知らせだったのだろうか。母さんは東京へ戻って間もなく病気がわかった。

「父さんはどう思う？」

見ると、父さんは困ったような顔をして川の向こう岸を眺めていた。

「俺にはよくわからないんだよ。こっちへ来たほうがよかったのか、がんばって残るべきだったのか」

残るという選択肢はなかったのだ。がんばれなかった。父さんだけじゃない、僕も、母さんのいないあの部屋ではがんばれなかったと思う。

「太一と菜月がこっちで少しでも前を向いて暮らせればいいんだが」

「前ってどっち」

笑いながらいうと、父さんもつられて笑った。

「どっちだろうな。そんなこと、考えたこともなかったのにな」

父さん、と僕はいった。

「友達ができたんだ」

「お、おお、そうか」

父さんは釣り糸を垂れたまま、顔だけこちらに向けた。

「②だからさ、こっちが前でいいんだよ、たぶん」

もう父さんの顔は見られなかった。照れくさくて、僕は川の真ん中辺りをじっと見つめていた。

日曜に、ようやく本屋へ行くことができた。

彼女がいると思ったわけじゃない。むしろ、いなくて当然だと思った。でも、文庫の棚の前に、あのなつかしい姿がなかったとき、僕はやっぱり落胆した。

あ。また「なつかしい」と思った。この辺のひとの顔はみんななんとなく似ている。そうつぶやいた父さんの言葉を思い出している。

そうか。話が解けた気がした。彼女はこの辺のひとの顔をしている。つまり、母さんとどことなく似ているのだ。だから、惹（ひ）かれた。恋とか愛とかじゃなく、本能的に惹かれたのだと思う。

「こんにちは」

背後で声がして、振り向いた。

彼女だった。

僕はその顔を見て、すぐに目を逸（そ）らした。どきどきしていた。たしかに、似ていた。みんな似ている、その範疇（はんちゅう）を少し超えているような気がした。

「……こんにちは」

彼女の目を見ずに軽く頭を下げる。

「ちょっと久しぶりだったね」

微笑んでいるかのようなやわらかな声が、僕の身体に染み込んでくる。その声までも、似ている、気がした。

「どうかした？」

彼女がいった。僕は黙って首を横に振った。彼女も黙った。目を見合わせないで、ふたりで立っていた。

（その３）

「読んだよ、重松清」
僕がいうと、彼女はほっとしたように表情をdクズした。
『流星ワゴン』が今のところ一番好きだ」
「ああ、よかった」
「それから、『きみのともだち』『再会』も」
彼女はちょっと声のトーンを上げた。
「そんなに読んだの？　こんな短い間に？」
僕はうなずいた。お小遣いではすべては買えないから、学校の図書館から借りたものも混じっている。
「かあちゃん」
「……え？」
僕は顔を上げ、真正面から彼女を見た。
「『かあちゃん』っていう本もすごくよかった」
半分、嘘だ。すごくよかったけれど、半分までしか読んでいない。いろんな「かあちゃん」が出てきて、涙で最後まで読み通すことができなかった。
「あれから考えたんだけど」
中村さんは『かあちゃん』には触れずに話題を変えた。
「新しいおすすめの本。たぶん、小説は重松清から広げていけると思うから。もし興味があったら、の新ジャンル」
うん、とうなずくと、彼女は先に立って歩き出した。背格好も似ている。女の子というのは、中学生くらいで身長が伸び止まってしまうのだろうか。
彼女に連れていかれたのは、意外な棚だった。
「何、これ、どうして。僕に？」
料理の本が並んでいる。初めての料理。和食のeキソ。スープの本。本場のパスタをおいしくつくるには。
「案外、お料理の本って読んでると楽しいのよ」
彼女はくすくす笑った。それから、真顔になって付け足した。
「いつか必ず役に立つから。ご家族のためにも」
ご家族。やけに大人びたいい方だった。彼女は知っているのだ。僕の「ご家族」から大切なひとりが欠けてしまったこと。今度は僕が「ご家族」のためにがんばるときだということ。
落ち着いた表情で僕を見ている彼女に向き直った。
「ありがとう。読んでみるよ」
そういうのが精いっぱいだった。
家に、母さんの使っていた料理の本が何冊もあったはずだ。あれを読んで、何かつくってみよう。母さんほどうまくはつくれないに決まっているけど、「ご家族」のために、何か、おいしいものを。
「ご家族に、母さんは含まれるのかな」
おそるおそる聞いてみた。彼女は目を伏せた。
「あたりまえじゃない。母さんはもちろん太一の家族でしょう」
顔は穏やかだったけど、語尾が震えた。
「中村さん」
名前はなんていうの。その見かけない制服はどこの学校のものなの。
何も聞けなかった。聞かなくても知っていた。家に帰って、おばあちゃんに古いアルバムを借りればわかることだと思った。
「③ありがとう」
はっきりと、しっかりと、伝わるように祈りながら僕はいった。彼女はにこにこと笑った。いつもそうしていたみたいに、小さく首を振って。
「こちらこそ」
涙でかすんだ目を上げると、彼女はもういなかった。

（宮下奈都（みやしたなつ）『なつかしい人』より）

＊１　重松清…日本の作家（一九六三～　）。後の『流星ワゴン』『きみのともだち』『再会』『かあちゃん』は重松の著作である。
＊２　上別府…「僕」のクラスメイト。以前「僕」は「中村さん」と本屋の前にいるのを上別府に見られていた。

（その４）

問１　──線部ａ～ｅのカタカナを漢字に直しなさい。

問２　──線部Ａ・Ｂの本文中における意味として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

Ａ「しげしげと」

ア　動揺しながら、繰り返し何度も
イ　不審に思ったので、じっくりと
ウ　真意を見抜くため、さりげなく
エ　不快感を覚えて、ざっと適当に
オ　敵対心をもって、わざとらしく

Ｂ「まるで親の仇みたいに」

ア　むきになり何度も繰り返して
イ　なんとか楽しげに振る舞って
ウ　抑えきれない憎しみを込めて
エ　思いがうまく伝えられなくて
オ　狙いの魚が釣れると確信して

問３　──線部①「思おうとした」とありますが、それはなぜですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　本屋で出会った女の子の素性は気になるが、上別府との会話からその正体は触れてはならないものであるという直感があり、彼女自身ではなく、教えてくれた本のことに意識を移そうとしたから。
イ　本屋で出会った女の子の素性は気になるが、遠い学校へ通学しているからには相応の事情があり、彼女が辛い思いをしているかもしれないので、むやみに詮索するようなことは避けたかったから。
ウ　本屋で出会った女の子の素性は気になるが、その正体に迫る術は無く、紹介してくれた本の内容にこそ、彼女の伝えたい真意が隠されており、そこから正体も見えてくるはずだと信じているから。
エ　本屋で出会った女の子の素性は気になるが、彼女が教えてくれた本によって、自分の生活が変化し、新しい環境で生きる僕の手助けとなってくれたことの方が、大切なはずだと考えようとしたから。
オ　本屋で出会った女の子の素性は気になるが、彼女が教えてくれた本はどれも本当におもしろく、楽しく読んでおり、わからないことを推測するよりも、その事実について感謝すべきだと考えたから。

問４　──線部②「だからさ、こっちが前でいいんだよ、たぶん」とありますが、「僕」がそのように言うのはなぜですか。八十字以内で説明しなさい（句読点も一字に数えます）。

問５　──線部③「ありがとう」とありますが、この時の「僕」の気持ちとはどのようなものですか。百字以内で説明しなさい（句読点も一字に数えます）。

問６　この文章の表現の説明として適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　「一緒にいた子？　誰だそれ」（14行目）、「黒いセーラー服って、今どきないだろ。どこの古めかしい学校だよ」（17行目）という上別府の言葉は、中村さんが実在しない女の子であることを暗示している。
イ　「ずるいぞ、菜月。僕だって読みたい本はあるし、行きたい本屋がある」（34行目）と「僕」の心情が連続することで、菜月に対し抱いていた不満がさらに増していく様子が読者にわかりやすく表現されている。
ウ　「僕はやっぱり落胆した」（67行目）という表現によって、中村さんに会いたいという本心から目をそむけようとしても、その気持ちに抗（あらが）えないという事実を「僕」が冷静にとらえていることが読み取れる。
エ　「かあちゃん」（91行目）という言葉は、本のタイトルを示すと同時に、「僕」が中村さんに対して抱いていた感情が思わず口からこぼれ出て、彼女に対する呼びかけになってしまったことを表現している。
オ　「彼女はもういなかった」（126行目）という表現でこの作品が締めくくられることによって、残された息子たちを救いたいという、中村さんの思いを「僕」がしっかり受け止めたということが暗示されている。

（その５）

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

社会の目をどう受けとめ、それにどう対応していくのか。受けとめかたも対応のしかたも人によって千差万別だといえるし、同じ人でも時と場合によって大いに異なることもありうるだろう。ここではこまかな差異は無視して、大きく二つに類別して考えてみたい。社会の目に従って生きる生きかたと、抗（あらが）って生きる生きかたの二つだ。

社会の目に従って生きていこうとするのは、いうならば①優等生的な生きかたである。盛り場では賑（にぎ）やかに陽気にお祭り気分で時を過ごすのが優等生的な生きかただし、学校の授業では教師の説明に耳を傾けて内容の理解に努めることが、アルバイト先では割り当てられた仕事を精出してこなすのが、優等生的な生きかただ。もっと視野を広くとって、［　A　］、この社会での高校生の生きかたといったものを考えれば、勉学に身を入れ、適宜、体を動かし、友だちづきあいもそれなりにこなし、あまり不規則にならないよう毎日を過ごすのが優等生的な生きかたということになろうか。

窮屈さのともなう生きかたであるのはいうまでもないが、近代以前の社会では一般的にこういう生きかたがよしとされたし、近代以降も日本ではこういう生きかたをよしとする声がけっして小さくない。「［　X　］」といったことわざや「和を大切にする」といった処世法がそれなりに説得力をもつのが、日本の近代社会なのだ。

社会の目がよしとする生きかたと、個々人がみずからこう生きたいと思う生きかたとは、そう簡単には一致しない。二つの生きかたのあいだには、矛盾・対立があり、葛藤がある。その矛盾・対立と葛藤を、社会の目のほうに力点を置いて解決しようとするのが優等生的な生きかただ。個人が個人として独自の価値を認められない近代以前の社会では、社会の目に従って生きるのをよしとするのは、きわめて自然な生活倫理だった。社会が社会としての秩序を維持し、Yつつがなく前へと進んでいくには、一人一人の人間が社会の目に従って――社会のしきたりや決まりに合わせて――生きていくことが必要だった。それに反する生きかたは、反社会的な「わがまま」な生きかたとして排斥された。

近代社会において、社会の目と個人の生きかたとの関係に根本的な変化が生じる。社会の目に従って生きることが唯一の正しい生きかたとは見なされなくなる。個人が自分の意志と信念にもとづいて行動することが価値あることだと見なされ、社会の目は、もはや、個人の行動や生活を規制する絶対の基準ではなくなる。社会の目に従わない――社会のしきたりや決まりを逸脱した――行動や生きかたは、反社会的な「わがまま」として一蹴されるのではなく、一定の条件のもとにおさまってさえいれば、個人の「自由」として社会的に容認される。いや、容認されるというにとどまらない。社会の進歩をうながす先駆的な行動ないし生きかたとして、aスイショウされ称賛されさえするのである。

こうして、社会の目、あるいは集団の目が個人を内に包みこむような前近代的な関係とは質のちがう関係性が登場してくる。社会の目（集団の目）と個人の意志や信念とが並び立つ、近代的な関係性だ。前近代的な社会ないしは集団にあっては、個人は社会の目に従って生きるほかなく、自分なりの生きかたを求めようとしても、社会の目を自分のものとした上で、それに上乗（うわの）せする形で自分らしさを出すしかなかったが、近代社会ではそこまでまわりに合わせて生きる必要はない。②社会の目に抗って生きる生きかたに意義と価値を認めるのが近代社会なのだ。

そのような変化をもたらした根本の原因は、生産力の向上によって社会が物質的にゆたかになり、個人の「わがまま」によって社会を壊される恐れが少なくなったことにある。暮らしが貧しく、各人のぎりぎりの労働とbキンミツな協力体制によってようやく社会が維持できるような状況の下では、わがまま勝手な行動や生きかたがゆるされるはずがない。子どもまでが働き手として駆りだされる社会では、人々の暮らしは社会の目のきびしい管理下に置かれるほかはない。

が、近代社会は、物質的にゆたかになったその分だけ個人の「わがまま」をゆるすようになった、という、ただそれだけのものではない。社会にゆとりができ、その分だけ社会の目の規制力が弱まって個人の「わがまま」がゆるされる、という、そんな消極的な自由の許容で事態はおさまらなかった。ひとたび「わがまま」がゆるされたとなると、人びとは社会の目に従わないで自分なりに生きることに、わくわくするような新鮮な充実感をいだいた。社会に包まれて人のために生きるのとははっきりちがう、内から生命があふれてくるような生きかた――生きている実感――がそこにはあった。個人の内面から沸きでるそうした充実感や生命感が、自由とか自立とか個性といったことばにまぶしい輝きをあたえた。個人を個として独自の価値をもつ存在ととらえる個人主義は、人々の生活実感と深く通い合う思想だった。

社会の目に抗って生きるのをよしとする価値意識も、近代社会によくなじむものの考えかただった。社会に生まれたゆとりゆえに個人の「わがまま」もゆるされる、というだけではなく、社会の目にわずらわされず、社会の目に抗って自分独自の生きかたを求め、見いだしていくことが、近代にふさわしい生きかただと考えられた。さらにいえば、個人が自由で自立した独自の生きかたを求め、見いだしていくことは、当の個人にとって価値ある充実した生きかただというにとどまらず、社会にとっても価値のある生きかただと考えられるに至った。社会が前へと進んでいくのに、個人の自由な活動が強力な推進力になると考えられたのだ。

近代以前の社会がごくゆっくりと変化していく社会であるのにたいして、近代社会はそれとは比較にならぬ速度で変化していく社会だ。変化をもたらす最大の要因は工業生産力の発展であって、物質的な富を増大させるこの変化は、大多数の人びとによって社会

（その６）

の「進歩」として歓迎された。昨日と同じように今日があり、今日と同じように明日があるのではなく、昨日より今日が、今日よりも明日が前へ進むのが近代社会であり、前に進める力として個人の自由な創意、自由な活動、自由な生きかたが容認され、歓迎される。停滞を嫌い、変化や進歩をよしとする近代社会は、社会の目に従って生きる生きかたよりも社会の目に抗って生きる生きかたのほうを時代にふさわしいものととらえるのだ。

［B］、社会がめまぐるしく変化し進展していく状況下では、社会の目に従うといっても、その目が変化し進展していくから、前近代におけるように、社会の目が確固たる基準とはなりにくい。社会や集団が一定のまとまりをもって存在し、そのなかで個人が個人として行動し生きていこうとするかぎりで、そこに個人を規制する社会の目や集団の目が消えてなくなることはありえないが、社会や集団がめまぐるしく変化し、そこにある目もまたその変化にたえずさらされているとき、社会の目や集団の目は多少ともあいまいなものにならざるをえない。前近代の優等生は、確固不動の社会の目に従う安定した生きかたを[c]ケンジできたかもしれないが、それとの比較でいえば、近代の優等生は社会の目に従おうとしても、そちらが多様で不確実であるがゆえに、その生きかたも不安定とならざるをえないのだ。そうした状況のもとで、改めて個人の生きかたと社会の目との関係が問われる。個人が自由で自立した生きかたを求めようとするとき、まわりからくる社会の目をどうとらえ、それにどう対処すべきなのか。

③個人と社会の関係が不安定になったからといって、社会の目に従うことこそ唯一の正しい生きかただとする、前近代の安定した考えに立ちもどるわけにはいかない。わたしの見るところ、日本の社会は個人の自由と自立を大切に思う考えが十分に根づいているとはとても思えないけれども、とはいえ前近代への[d]カイキを願うほど自由や自立が敵視されたり[e]ヤッカイ視されたりしているわけではない。個人の自由と自立が一方で求められ、他方、それを包むようにして社会の目がある。その二つを基本要素として自分の、また他人の、社会生活を考えていくしかない。そういえる程度には日本の社会は近代化されているのだ。個人にとって、社会の目を意識の外に完全に追い払ってしまうほど自由には生きていけないし、社会の目にとって、個人をすっぽりと包みこんでしまうほどの完全な規制力を発揮することはできない。

［C］、個人の自由と社会の目との葛藤は、たがいに相手の存在を認めつつ共存していくほかはないことになる。④それは個人にとってどんな生きかたが求められることなのか。

（長谷川宏（はせがわひろし）『高校生のための哲学入門』より）

問１　線部a～eのカタカナを漢字に直しなさい。

問２　空欄［A］～［C］に入る最も適当な語句を次の中から選び、記号で答えなさい（ただし、同じ記号は二度選べません）。

ア　それに　　イ　ところで　　ウ　となると　　エ　しかし　　オ　たとえば

問３　（ⅰ）空欄［X］に当てはまることわざとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

（ⅱ）――線部Y「つつがなく」の本文中での意味に最も近い四字熟語を次の中から選び、記号で答えなさい。

［X］
ア　石の上にも三年
イ　亀の甲より年の劫（こう）
ウ　郷に入れば郷に従え
エ　親しき仲にも礼儀あり
オ　二兎（と）追うものは一兎も得ず

Y「つつがなく」
ア　一心不乱
イ　平穏無事
ウ　泰然自若
エ　行雲流水
オ　電光石火

問４　――線部①「優等生的な生きかた」とありますが、それはどのような生きかたですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　自分が望む生きかたと社会が求める生きかたとのあいだで、常に葛藤しながら生きていく生きかた。
イ　自分なりの生きかたを追求しようとして、規制の多い社会になじまず一人で精一杯全力を尽くしていく生きかた。
ウ　わがまま勝手に判断することをはじめから望むこともなく、世の中の規範に則（のっと）って生きようとする生きかた。
エ　個人の意志と信念にもとづき行動するよりも、社会のしきたりや決まりから逸脱しないことを優先する生きかた。
オ　個人の行動や生活を規制してくる基準とは何なのか、という物事の本質を見抜く力を伸長させていく生きかた。

（その７）

問５　――線部②「社会の目に抗って生きる生きかたに意義と価値を認めるのが近代社会なのだ」とありますが、なぜ「近代社会」では、そのような生きかたに意義と価値が認められるようになるのですか。百字以内で説明しなさい（句読点も一字に数えます）。

問６　――線部③「個人と社会の関係が不安定になった」とありますが、それはなぜですか。五十字以内で説明しなさい（句読点も一字に数えます）。

問７　――線部④「それは個人にとってどんな生きかたが求められることなのか」という問いかけについて興味を持った高校生たちが、この文章の続き（【資料】）を読みました。本文と【資料】の趣旨に最も近い【高校生の発言】はどれですか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

【資料】

古い秩序や封建的な目を否定し拒否するだけでは自由な生きかたは実現しない。古きもの、遅れたものを否定し拒否するとき、未知の新しさへと向かう自由が実現されるのはたしかだが、その自由は否定の色合いが強すぎて、新しい生きかたを生み出す積極的な内容を欠いている。自由を求める個人は、社会の目に抗いつつ、自分にふさわしい具体的な生きかたをどう構築したらいいのか。

社会の目に抗いつつ、抗ったその生きかたに具体的な内容を盛りこむには、社会の目にきちんと向き合うほかはない。それは、社会の目に背を向けるのではなく、それと正面から向き合うのだ。そのとき、社会の目は、単純に否定し去ることなどできないことが見えてくる。

【高校生の発言】

ア　生徒Ａ　大学入試には必要だから数学をがんばって勉強してきたけど、現代の情報化社会のセキュリティを支えているのは数学を前提とするプログラミングであることを知って、実社会で役立っている様々なシステムには数学が欠かせないということがわかったよ。

イ　生徒Ｂ　親や教師たちがしきりにクラブ活動への参加をすすめたのがきっかけで、いやいやながら卓球部に入部したけど、地区予選の大会で一つ勝つことができて、苦労や努力、挑戦を通して得られるものがあると言っていた親や教師たちの考えもわかったよ。

ウ　生徒Ｃ　学校では制服着用が指定されているものの、制服よりも私服の方が個性を生かせるのではないかと思っていたけど、制服着用の現在ですら学校周辺の人たちから服装や身だしなみの乱れを指摘されることが多いということを知って、私服の導入は到底現実味がないとわかったよ。

エ　生徒Ｄ　インターネットが普及した現代では、細かい知識の暗記は必要じゃなく思考力を伸ばすことが重要だと考えてその勉強ばかりしてきたけど、授業の時に共通の知識がないと議論が進まないことを実感して、社会に出る上で必要となる知識は覚えておかないといけないとわかったよ。

オ　生徒Ｅ　毎日学校に登校して授業を受けなくても家からオンラインで受けられるようにするのが合理的だと思っていたけど、実際に家からオンラインで受ける機会ができて、家のインターネット接続状況によっては不都合も起こるとわかり、やっぱり登校する方がよいとわかったよ。